

2025 年 7 月 27 日聖餐礼拝

『心を一つにして』

使徒の働き1:12～14

聖書箇所

12 そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあった。

13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の部屋に上がった。この人たちは、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった。

14 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

導入：船頭多くして船山に上る

いきなりですが、みなさんは船頭多くして船山に上るということわざをご存知でしょうか。物事において指示をする者が多ければ、海を渡るはずの船が山に登ってしまうほど見当違いに進んでいってしまうということを表すものです。いくら優秀な人が導くとしてもそれぞれの心がバラバラならば、本来の目的が達成されることはありません。人が集まるときに心を一つにして目的に進んでいうことがいかに重要であるかがわかります。

心を一つにすること。このことが重要なのは教会においても同じことです。礼拝は神様に捧げるものであるため、この時間、私たちの心は神様に向いていなくてははいけません。神様だけに心を向けるのです。祈りも、賛美も、みことばを読む時も、私たちの心は一つとなります。この朝、私たちは聖餐式を行います。私たちの救い主を覚える時です。救い主はただお一人です。私たちがイエス様を覚えるのであれば、私たちの心は一つとなります。そこで、今一度私たちの心を一つにしていくことを、イエス様の弟子たちから確認して行きたいと願います。

本文1:かつての弟子たちの姿

先ほどお読みした13節には、裏切り者のユダ以外のイエス様の弟子たちの名前が登場します。ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダ。彼らはここで、イエス様の家族と一緒に心を一つにして祈っているといえます。共に集まり、心を一つにして祈る。すばらしいことですね。まさにイエス様の弟子として、ふさしい姿であると言えるでしょう。

彼らがこのように集まり、心をつにして祈っていたのは弟子たちに聖霊は望んでくださった、ペンテコステの直前のことになります。ペンテコステとはイエス様が死んでから 50 日後の出来事です。では、50 日前の彼らの姿はどうだったでしょう。[マルコ14:46～52](#)

46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

47 そのとき、そばに立っていた一人が、剣を抜いて大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落とした。

48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。

49 わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえませんでした。しかし、こうなったのは聖書が成就するためです。」

50 皆は、イエスを見捨てて逃げた。

51 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。

52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。

イエス様が捕えられた時、彼らはイエス様を見捨てました。逃げました。自分のいのちが危険だったからです。一つになるどころか、バラバラになってしまっていたのです。51節のある青年とは一番熱心だったペテロでしょうか。他の人がイエス様を見捨てても、私は絶対イエス様を見捨てないと豪語して彼も、服を脱ぎ捨て、裸で、必死に逃げていったのです。バラバラですね。続けてマルコの福音書はイエス様の復活の知らせを聞いた弟子たちの姿も記録しています。[マルコ16:9～13](#)

9 「さて、週の初めの日の朝早く、よみがえったイエスは、最初にマグダラのマリアにご自分を現された。彼女は、かつて七つの悪霊をイエスに追い出してもらった人である。

10 マリアは、イエスと一緒にいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところに行って、そのことを知らせた。

11 彼らは、イエスが生きていて彼女にご自分を現された、と聞いても信じなかった。

12 それから、彼らのうちの二人が徒歩で田舎に向かっていたとき、イエスは別の姿でご自分を現された。

13 その二人も、ほかの人たちのところへ行って知らせたが、彼らはその話も信じなかった。

イエス様を見捨てて逃げた彼らは、また集まっていたことがわかります。しかし、どうやら信仰を持って、または、悔い改めて集まっていたわけではないようです。11節と13節に記されているように彼はイエス様の復活を信じなかった、信じられていなかったからです。これからどうするのか、どのようにすればいいのか、現状の問題をどのように解決すればいいのか、そのようなことを話し合うために集まっていたのかもしれませんが。依然として、自分たちの悩みや恐怖は消えない。そのことばりに目を向けていたのが、かつての彼らの姿です。集まっても心はバラバラであったことがわかります。

本文2:復活のイエス様に出会う

改めて使徒の働きに記されている弟子たちの姿を見てみましょう。同じところに皆が集まり、心を一つにして祈っているのです。さらに使徒の働き1章の後半を見ていきますと、彼らがイエス様のことを証し、そして、新しく弟子を選んだことがわかります。最早彼らの中に怯えはありません。恐れ、悩みはないのです。彼らはこれからどのようにみことばを人々に伝えていくことに集中していました。神様が彼らに語られることに耳を傾けることに全力を注いでいたのです。

何が彼らを変えたのでしょうか。この50日間で彼らを取りまく環境が変わったのでしょうか。彼らを脅かす脅威が消えたのでしょうか。いいえ。そうではありません。彼らの環境は何一つ変わっていないのです。ただ一つ。彼らは復活の主イエス・キリストに出会ったのです。**使徒の働き1:3～9**

3 イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

4 使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

5 ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」

6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興して下さるのは、この時なのですか。」

7 イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

9 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

復活の主イエスに出会う。復活の主イエスを自分の主として受け入れる。彼らの悩みが、恐れが、不安が取り去られ聖霊に満たされる理由がここにあるのです。環境の変化ではありません。さらに言うならば、イエス様が彼らと一緒にいないことは50日前と同じです。環境も変わらなければ、イエス様が私の側にいない。そのことは変わりありません。しかし、復活の主イエス・キリストに出会うその時、人々は集まり、心を一つにして祈り、みことばを宣べ伝えるために準備をし、悩み・恐れに囚われることはありません。

信仰の歩みを歩んでいるみなさん。私たちもまた復活の主イエス・キリストに出会う、出会っている者です。つまり、私たちもイエス・キリストにあって心を一つにすることができる者です。そんな私たちはどんなイエス様をみているのでしょうか。イエス様と共に歩む私たちの心はどのように心を一つにしているのでしょうか。私たちの目は、私たちが置かれた環境を見ます。私たちの目は私が直面している悩みを見ます。私たちの心は、私たちの抱えている痛みによって蝕まれていきます。イエス様を知っていても、心がバラバラです。

共に祈っていても心を合わせることができないこともあるでしょう。共に声を合わせて賛美を捧げても、心が一つになれないこともあるのではないのでしょうか。そのような時に私たちの心は復活のイエス様に会っているといえるのでしょうか。

礼拝の場に集まっている私たちは、何よりも復活の主イエスに出会っている者であることを忘れてはいけません。私たちには復活の希望が与えられているのです。弟子たちを祝福された復活のイエス様は、私たちの心をつにしてくださる方です。イエス様の復活の主に出会った喜びが私を満たす時、恐れではなく、不安ではなく、悩みではなく、心をつに主にして主に祈りをささげる平安が私たちに与えられるのです。

結論

イエス・キリストがこの世に来られた理由は、私たちを救うためです。罪によって生まれながらに神様の怒りを受け、死ぬ以外の可能性がなかった私たちに与えられたのが、イエス・キリストの裂かれた肉と流された血です。その事により私たちは死から永遠のいのちを得ることができました。滅びから復活を得たのです。私たちはイエス様とともによみがえり、神様と交わりができるようになりました。罪の中で滅びに向かっていた私たちは、神様と何の接点もない存在でした。暗闇の中をただただ歩んでいる者だったのです。そんな私たちに与えられた光、それが、イエス・キリストなのです。その光は聖餐式を執り行おうとする私たちに語りかけます。わたしを覚えて、これを行いなさい、と。**ルカ22:19～20**

19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

十字架の上でイエス様の肉が裂け、血が流れ出しました。十字架とは死の象徴です。罪の象徴であり、苦難の象徴であり、恥の象徴であり、何よりも敗北の象徴です。イエス様は弟子たちにそんな十字架の上で裂かれる肉と血を覚えなさいというのです。なぜならば、それが新しい契約となるからです。死の象徴が、罪の象徴が、苦難の象徴が、恥の象徴が、私たちの救い主であるイエス・キリストがかかったことによって全く新しいものになるからなのです。

私たちの心が一つになることを願います。私たちが、私たちのために肉が裂かれ、血を流されたイエス様を覚えることを願います。心をつにし、主に祈りをささげる私たちとなることを心から願います。